

2026 年（令和 8 年）8 月校長メッセージ「この夏に小説『ウィキッド』を読んだ」
（9 月の校長メッセージは 2 学期始業式での校長講話がベースとなっています。）

2 学期が始まりました。2 学期は期間も長く、さまざまな行事や進路に向けた大切な提出、出願などがそれぞれの学年にあります。学習だけでなく、行事にも力を入れ、また重要な提出や手続きにも気を配りながら、生徒一人一人が充実した 2 学期を過ごし、大きく成長することを期待しています。9 月最初の土曜日と日曜日に文化祭を開催します。すでに準備が進んでいる学年やクラス、団体もあるようですが、9 月に入ってから本格的に準備に取り掛かる団体もあるようです。ぜひレベルの高い文化祭を開催し、来校者の方から「さすが両国」と言ってもらえるような文化祭をつくり上げたいです。

さて、中学 3 年生は、ユタで『オズの魔法使い』の英語劇を行いました。そこで今日は、『オズの魔法使い』とも関係の深い『ウィキッド』という小説について、この夏休みに私が読んだ感想をこのメッセージに書きたいと思います。

私が小説『ウィキッド』（グレゴリー マグワイア（著）市ノ瀬 美麗（翻訳）ハヤカワ文庫）を読もうと思ったきっかけは、中 3 の英語劇を見たことだけではなく、ユタからの帰りの飛行機の中で、映画『ウィキッド』後編を観て、興味を引かれたからです。

映画『ウィキッド』は、日本でも前編・後編ともに公開され、前編はテレビでも放映されましたので、観た人も多くいると思います。私は数年前に劇団四季のミュージカル『ウィキッド』を観たことがあり、その後、映画の前編もテレビで観ました。そして今回、飛行機の中で後編を観て、原作はどのような作品なのだろうと思いました。

皆さんもご存じだと思いますが、『ウィキッド』のもとになっているのが『オズの魔法使い』です。1900 年に発表された『オズの魔法使い』は、アメリカの子供たちの多くが読んでいられると言われるアメリカを代表する童話です。

一方、原作の『ウィキッド』は、その『オズの魔法使い』をベースとして、1995 年にアメリカの作家グレゴリー・マグワイアによって発表された、大人向けの新しい小説です。映画『ウィキッド』は観たけれど、原作を読んでいないという人も多いと思います。実際に読んでみると、原作は映画とはかなり異なる内容と雰囲気の作品でした。原作『ウィキッド』の背景には、1991 年の湾岸戦争以降、現代に至るまで世界各地で戦争や紛争が続いていること、そして戦争を正当化するためのプロパガンダやフェイクニュースが多用される中で、何が正義なのかが見えにくくなっている現代社会への問題意識があり、作品の重要なモチーフとなっています。政治的支配を正当化するため、意図的に内なる「敵」、外なる「敵」がつくり出され、攻撃や抑圧、差別を継続することで権力構造を維持する様相を、ファンタジーの手法によって描いています。原作『ウィキッド』では、政治支配による差別や抑圧、暴力が混沌としているオズの国を舞台に、プロパガンダやフェイクニュースが寓話化され、体制を覆そうと試みる西の悪い魔女と呼ばれるエルファバが描かれています。

映画と原作とに共通しているのは、オズの国が「オズの魔法使い」という独裁者によって支配されている国として描かれている点です。映画では、エルファバの親友として、オズの国を救う希望の象徴とも言えるグリンダが登場しました。しかし、原作内のグリンダは、映画ほど重要な役割を果たしていません。原作は、オズの国が生まれ変わって良くなっていく希望が全く感じられず、率直に言って、読んでいて暗く重い気持ちになっていく内容でした。現在の世界情勢をあまりに的確に寓話化していると感じたからです。

原作「ウィキッド」を読みながら、ジョージ・オーウェルが1949年に発表した小説『一九八四年』（ジョージ オーウェル（著） 高橋 和久（翻訳） ハヤカワ文庫）を思い出しました。

『一九八四年』では、「ビッグ・ブラザー」という政権によって統治された独裁国家が描かれています。市民はテレスクリーンという装置によって常に言動や思想を監視され、反体制的な思想や行動をもつ者は思考警察によって逮捕され、社会から抹消されます。さらに国家は、ゴールドスタインという反政府組織の人物を最大の敵として報道し、その恐るべき敵に立ち向かうために、市民たちが一致団結するように仕向けています。

原作でも映画でも、『ウィキッド』においては「オズの魔法使い」はエルファバを悪の魔女として市民に印象づけ、人々を扇動します。そして差別や抑圧を正当化し、さらに話すことのできる動物たちを弾圧する方向へと社会を導いていきます。『ウィキッド』と『一九八四年』は非常によく似た世界観だと感じました。そして、もしかすると私たちの社会はすでに『オズの国』や『一九八四年』の世界のように、誰かによって扇動され、差別や抑圧が正義の名のもとに進められるような世論形成が行われているのではないかと、それが当たり前で、そのことに気が付かない世界になってしまっているのではないかという恐怖を感じました。

映画『ウィキッド』は、原作とは異なって世界が救われるに違いないと思わせる希望が描かれています。エルファバの正義感と、グリンダのエルファバを思う気持ちが、きっとオズの国を立て直してくれると映画のエンディングで期待することができます。私たちの社会でも、そのような希望を失わないために、自分自身で世の中の動きをよく見極め、何が正義で何がプロパガンダやフェイクなのかを判断していかなければなりません。

原作『ウィキッド』は、そんなことを深く考えさせてくれる小説でした。少し長い作品ですが、興味のある人はぜひ読んでみてください。

さて、映画『ウィキッド』で何より感動的なのは、主演の二人、グリンダ役のアリアナ・グランデとエルファバ役のシンシア・エリヴォの歌です。二人の歌は本当に素晴らしいです。映画をすべて観るには時間がかかりますが、二人が歌うシーンはYouTubeなどでも観ることができます。まだ観ていない人は、ぜひ一度観てみてください。

そして、二人が歌う歌詞を英語で理解できるように、両国の生徒たちの英語力がさらに伸びていくことを期待しています。インターネットで検索すると、歌詞を解説しているホームページなどもありますので、理解するのに役立ちます。

このように、世界で話題になっている英語の歌の歌詞や、政治家が発表する英語の声明文などに私たちは関心をもち、どんなメッセージが発信されているか、自分から積極的にコネクトしていく必要があると考えています。生きた英語に触れる習慣を身に付けるだけでなく、日本語以外の言語のアンテナをもたなければならないと思うからです。

日本語しか使える言語をもたないということは、ものを考える際に、その材料の全てを日本語のフィルターに通さなければならないということです。日本語にプロパガンダやフェイクが含まれていても、他の言語の情報や材料を使って対照化することができないと、何が正しいか判断することができません。今回ユタで私たちがお世話になった現地の若い人たちは、英語と日本語の他に、中国やスペイン語やフランス語を使うことができました。コミュニケーションツールを数多くもつこと以上に、判断材料を複数もつことはすばらしいことです。

それでは、力を合わせて、素晴らしい2学期をつくり上げていきましょう。

過去の校長メッセージ

2026年8月校長メッセージ	「What's going on?」
2026年7月校長メッセージ	「両国ご近所の博物館」
2026年6月校長メッセージ	「都立中高一貫教育校の選び方」
2026年5月校長メッセージ	「おいしい甘酒の作り方」
2026年4月校長メッセージ	「Memory of Mankind」
2026年3月校長メッセージ	「時間について考えたこと」
2026年2月校長メッセージ	「キャリア教育優良校文部科学大臣表彰受賞について」
2026年1月校長メッセージ	「ガザのお父さんからの日本の中高生へのメッセージ」
2025年12月校長メッセージ	「唐獅子さん」
2025年11月校長メッセージ	「カーボンリサイクル」
2025年10月校長メッセージ	「辞書を食べる」
2025年9月校長メッセージ	「恐竜の死体が化石化するプロセス」
2025年8月校長メッセージ	「グラフを発明したのは誰か」
2025年7月校長メッセージ	「早朝の両国にいるオナガは一体どこから来るのか」
2025年6月校長メッセージ	「現代社会における霸道と王道」
2025年5月校長メッセージ	「おいしいラッシーの作り方」
2025年4月校長メッセージ	「『NEXUS 情報の人類史』を読んで考えたこと」